

## 失われつつある大切なもの

大岡集落学校講師 宮下 健司

大岡住民自治協議会は二〇一五、一六年の二年間、大岡一〇地区すべてをまわり、足元を見つめ直し、地域に埋もれた「宝」を発見する参加体験型の「大岡集楽学校」を実施した。参加者は小中学生からお年寄りまで延べ一、〇〇〇人にも達した。ここで、大岡の自然と風土、大岡の大地の匂いを漂わす人に出会い、大岡の風景の中に刻まれてきた風土や歴史を読み解き、そこに暮らしてきた人々の知恵と意思を発見してきた。

私はこの大岡集楽学校で、大岡小中学校に通う「大岡ひじり学園」の山村留学生と邂逅かいこうした。都会からやってきた山留生の子どもたちが、第二のふるさととなる大岡という地域のことを夢中になって前のめりに学ぶ姿に接し驚いた。その目の輝きと前向きな姿勢、確かな存在感はどこからくるのだろうかと思いつつ、収穫祭や修園のつどいなどに参加しつつ、ひじり学

園の山留生との二年間の交流が始まった。

二〇一六年四月に行われた中牧神社なかもぎの御柱祭りでは、山留生の男子が上半身裸になって、秩父屋台囃子の太鼓を打つ姿は圧巻で、遠くから駆けつけた修園生も太鼓の輪に加わって、七年に一度の大岡最大の祭りに華を添えていた。

二〇〇四年から始まった夏の「夢っ子祭り」は、山留生が中心となって地元大岡小中学校の児童生徒を巻き込んで、地域を巡回して祭りを創り上げる活動である。芦あしノ尻しりの集落センターに訪れた一行を眼にすると、狭い会場の中で「エイサー」で高く飛び上がったり、「はねっこ」の扇子を持つての踊りは躍動感に溢れ、集まった地域の人たちに若さ溢れるエネルギーとともに質の高い芸能と感動を手渡していた。

旧大岡村は過疎化・高齢化・少子化という課題の中で一九九七年から山留生を受け入れたことで、都市の子どもたちとの交流が生まれ、地域が活性化してきた。ちなみに二〇二〇年七月現在の太岡地区の人口は八七九人で、二〇〇五年の長野市との合併時から六割も減少し、高齢化率は五七パーセントである。大岡小学校は全校児童一四人のうち山留生は九名、大岡中学校は全校生徒一三人のうち六名が山留生である。

五〇人の山留生を受け入れた農家代表の小林壹男さんは「大岡が今あるのは山留生のおか

げ。ひじり学園の山村留学は大岡になくはならない事業」「台風で倒れた稲のハゼを起こすのに、世話をした山留生が連絡を取り合って駆けつけてくれた」と語る。

山村留学での自然、農業、野外活動、太鼓・笛・踊り・劇などの体験は、すべて五感という精度の高いセンサーで感知した第一次情報としての直接体験が連続し、心の中にさまざまな事件が起き、生きる力となつて蓄積されていく。本物に出逢い、本物に触れ、その後の人生を左右するような「邂逅かいこう」と呼べる運命的な出逢いがあったからこそ感動があり、伝えたい言葉、詩や文章が自然と生まれ、紡ぐまれていると感じた。

日本の高度経済成長期は農村型社会を都市型社会へと変貌させていったが、この過程での近代化・都市化や合理化・効率化によって周辺部の中山間地や農業が軽視され、ムラ社会の伝統や文化への関心が薄れ、消えていったものが多い。一方で、子どもたちを取り巻く教育環境も大きく変貌し、受験戦争やいじめ・不登校などが深刻化していった。

その中で、山村留学は現在の都市化社会が失った自然や農業・農家での直接体験、集団生活や農家民泊、長距離徒歩通学、地域の祭りや年中行事への参加を通して、未来に向かって前向きに変容する山留生の具体的な姿として、その存在意義を示してくれている。つまり、都市化社会の進展によって、家庭・地域・学校・教育の中で失われつつある大切なものが、山留生の

変容していく姿の中にあるように思えてならない。

子どもたちは私たちの希望、未来であり、大岡ひじり学園の子どもたちの瞳の輝き、元気が、小中学校の先生や子どもたちを変え、地域の人を変え、大岡を変え、支える力にもなっているのである。

みやした・けんじ……………

長野県生まれ。元長野県史常任編纂委員、長野県立歴史館総合情報課長、長野市立若槻小学校長等を歴任。現在、聖博物館名誉館長、長野県カルチャーセンター・長野県シニア大学講師、長野市伝統的建造物群保存地区保存審議会委員、大町市文化財保護審議会委員等。県下全市町村を歩き、長年地域史研究に取り組んできた。一方で、アジアの先住民族の暮らしや棚田に関心をもち現地調査。大岡集楽学校では講師を務め、現在は大岡の古老から聞き取りを重ねて「記憶の記録化」をし、民俗誌として後世に語り継ぐ地元学の活動に取り組んでいる。